

第1章の注

注1 宮地(1961)では、アクセントについて、「音調の面から見た語あるいは文節の“形(かたち)”」と、「そこからそのきわだたしさを抽象したところの“型(かた)”」とを区別している。「形」が実際の高低配置であるのに対し、「型」はより抽象的なものだしている。

注2 これらの研究は、千葉大学地図課題コーパスにおける対話データが分析の対象として利用された。地図課題コーパス(小磯他1994, 1995)とは、様々な研究領域における対話への関心の高まりをうけ、異なる研究分野に共有可能なコーパスを作成するという目的で構築された128対話22時間におよぶ音声、画像データである。その際1.自発的かつ自然な発話の収録、2.音響的な品質の保持、3.収録条件の統制、4.一定以上の規模の確保の4点が重要視された。具体的には様々な組み合わせのペア(友人同士、初対面者同士など)が千葉大学工学部の防音室でそれぞれ同じような地図(完全に同じものの場合もある)を持ち、窓のある壁越し(互いに顔しか見えない状態)に向き合って座り、一方が他方に言葉だけで地図上のルートを説明し、相手に与えられた地図に指示通りのルートを描かせるという作業を、録画、録音して得た対話データである。

注3 原口(1980, 1994)は生成音韻論の一つで、Goldsmith(1976)等により提唱された自律分節理論に基づき、日本語のイントネーション記述を行った。これは基本音調メロディー(単語や句を普通に発音したときの音調)と特殊音調メロディー(ほぼイントネーションに相当する)を同レベルで扱い、音調と音調を担う要素(音節)との関係に関する規則にしたがって、音調をH、Lの記号で記そうとするものである。なお、原口(1994)によれば、自律分節理論は「音調や分節をはじめとする音声の内部構造に関する主張とそれらの結びつき方に関する関係論の部分が明確に分かれていること」が特徴だという。そして「自律分節理論の内部構造に関する基本的な考え方は、音調のレベルは、他の分節のレベルとは、完全に独立したレベルを構成しており、それ自体独自の分節をなしていると考えられることにある。」という。したがって、音調(や強勢)は、中心をなす分節の部分に付属的にのっかったもの、かぶさった従属的なものと見なすアメリカ構造主義言語学やLeben(1973, 1976)の超分節音韻論とは異なるものだとしている。

注4 第一に、「交感的(phatic)な側面と言うのは、ハドソン(1988, p.151)の言う「単に社会的関係を確立したり強めたりするためのもの—マリノフスキーが交感的言語使用phatic communion と呼んだもの、つまり、人々が互いの存在を認識していることを単に示すためだけに行う類のおしゃべり」のよ

うに、特に何かを伝えたり、他者に行動をおこさせたりするためではない言語機能の一側面を指しているものと考えられる。また第二に、言語の諸機能の分類方法は、研究者ごとに様々であり、ここに挙げたBrown, G. & Yule, G. (1983)の分類もその一例に過ぎない。参考までに、ハリデー他(1991、p.27)の表を以下に示す。この他にも、ハドソン(1988、p.158)が極めて有力なものとして挙げた「発話行為speech-act に基づくもので、主に、英国の哲学者オースティンJ. L. Austinに続く哲学者、言語学者によって発達してきた」言葉の機能に関する洞察も看過できないだろう(オースティン1978、サール1986等参照)。

実用的		魔術的		マリノフスキー(1923)
説話的	行動的			
描写的 (3人称)	意志的 (2人称)	表現的 (1人称)	Bühler(1934)	
相互作用的		表現的		詩的
情動的	意志的			
情動的 会話	調整 的会 話	ムード 的会話	探索的 会話	モリス(1967)
情動的 使用 (内容に 関する もの)	相互作用的 使用 (効果に 関する もの)		想像的使用	
	他の 管理	相互支持 自己表現	儀式的	詩的
注: 網のかかった部分は研究者が扱っていないことを示す				
ハリデー(1991)、P. 27の<図2. 1> 言語の機能的理論(機能は「使用」と等しいとされて なお、研究者名は全てカタカナ表記であった。また、図中の下線はここでは省略してある。				

注5 郡(1997)は、「6. 補足」(p.199)の中で、「イントネーション」の概念をめぐっての従来からの混乱を避けるため、まず物理的な音の上がりさがりを「音調」とよび、それを、単語の特徴としての「アクセントが要求する音調」、文の意味や単語間の意味関係の反映としての「アクセントの強調と弱体化」「表現意図(モダリティー)を反映する音調」、「文末詞固有の音調」、「情緒や対人態度を反映する音調」に分解し、あえて「イントネーション」という言葉を使わないことを原則としており、ここではイントネーションの定義を積極的に与えてはいないが、「結局、語アクセントが要求する以外の音調の型をイントネーションと呼ぶ結果となった。」とある。

注6 音声分析ソフト「音声録聞見」で作成した、声道の共鳴特性を分析するための周波数帯ごとのエネルギーの時間変化を示した図のこと。共鳴した周波数帯の部分はエネルギーが大きく、色が濃く

現れる(日本音響学会1996)ようになっている。その模様の動きから各音韻の推移やポーズを確認し、それぞれの長さが計測できる。